

ヴァレリー全集 補卷

補遺

講義・講演

対談

筑摩書房

ヴァレリー全集 補巻
補遺 講義・講演 対談

1971年10月30日初版第1刷発行
1974年4月10日新装版第1刷発行

発行者 井上達三
発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2-8
電話 東京 291-7651
郵便番号 101-91
振替 東京 4123

印刷 株式会社精興社
製本 牧製本印刷株式会社

(分類) 1398 (製品) 77713 (出版社) 4604

目次

I 補遺

『詩について』

詩は不死鳥

『詩選』序

『グアテマラ伝説集』序

『小説的組曲』序

『航海』序

手紙

『マラルメ論叢』

〔ロートレアモン〕

〔『サンリボルリルーの墓』に寄せて〕

〔レーモン・ド・ラ・タエードの文壇生活

五十年記念に寄せて〕

『フランス全土』序

『哲學論考』

『人生遊戯規定若干』序言

清水 徹訳 3

佐藤正彰訳 5

佐藤正彰訳 14

佐藤正彰訳 16

菅野昭正訳 20

佐藤正彰
清水 徹訳 24

佐藤 朔訳 44

松室三郎訳 46

佐藤正彰訳 51

佐藤正彰訳 53

佐藤正彰訳 56

『認識のさまざまの道』序

佐藤正彰訳 59

『芸術論集』

書籍について

カルル・ボエス宛手紙

佐藤正彰訳 64

純白の紙

佐々木明訳 66

『印刷活版術五十年』

渡辺一夫訳 67

彩色挿絵

佐々木明訳 69

書物の顔かたち

滝田文彦訳 76

『映画』

菅野昭正訳 88

『文明批評』

『侏儒号航海誌』序

佐藤正彰訳 96

『現代世界の考察』

省察

清水 徹訳 99

ラテン・アメリカの友へのメッセージ

佐藤正彰訳 102

*

アニメス

中村光夫訳 105

II 講義・講演

ヴァレリー討論会挨拶

佐藤正彰訳

143

詩学講義

大岡 信
菅野昭正訳

147

「占領下の教授ポール・ヴァレリー」より

寺田 透訳

243

『ナルシス』諸篇について

佐藤正彰訳

255

詩的回想

朝吹三吉訳

266

ヴァレリーとヴォルテール

佐藤正彰訳

294

「生理学についての講演」

佐藤正彰訳

319

「教育について」

佐々木明訳

325

「アルチュール・フォンテーヌの葬儀に

菊池映二訳

328

おける弔辞」

*

知的協力談話会議事録から

佐藤正彰訳

333

第一回 「ゲーテ百年忌記念」から

333

第二回 「文化の将来」から

340

第三回 「ヨーロッパ精神の将来」から

343

第五回 「現代人の形成」から

350

第六回 「新しきヒューマニズムへ」から

356

第八回「文芸の近き運命」から

Ⅲ対談

ポール・ヴァレリーとの対話

「批評はどこに行くか」

ヴァレリーと医学

「どのように書くか」

Ⅳ年譜

系図

滝田文彦訳	375
佐藤正彰訳	444
佐藤正彰訳	446
佐藤正彰訳	450
稲生 永編 野村英夫	453
稲生 永編 稲生 永編	別刷

I
補
遺

詩は不死鳥——〈詩〉に関する覚え書

清水 徹記

〈詩〉^{ポエジー}は、〈不死鳥〉である、——一テクストの理解はそのテクストを灰燼に帰せしめるが、〈詩〉^{ポエジー}の形式はそうした灰燼からふたたび生まれ出てくるはずだ、という意味で。

ところで、ある種の晦渋性は読者を強制して、あるいはその読書行為を放棄させ、あるいは文字へ、または音へと舞い戻らせる。

テクストは、完全に思想へと溶解し、うるものであってはならぬ、言いかえれば、すでにある種の仕方ですらわれているものを、別の仕方ですることができるといふ可能性へと溶解しうるものであってはならないのだ。思想と、同じもとの言説とのあいだを振動するというのが詩の特徴であり、最良の詩とは、言語の通常の用法においてはただ一度だけの使用によって焼き尽くされてしまうものへの欲求を、最高度に刺戟する詩のことである。

このことからの、また私の観察からの帰結だが、詩句の産出は、思想と言語とが同程度にたがいにそのおかし、またそのかされるものであるような状態を要求する。語はさまざまな観念をあたえるが、その数と等しいだけ、観念はまたさまざまな語をあたえる（語と言ったが、言語のそれ以外の諸部分についても同じだ）。この意味は、つまり、語は観念と対等の資格において制作に参与することを許されているということ

であり、このことを意識し、あるいはすくなくともこのことを感じていることと、この種の許可をあたえる自由が承認されていることが、詩作状態の構成要因である。詩人は、通常なら相互に置換しあい、あるいは排除しあう要素の突飛な構成にのめりこむ。

詩は不死鳥 LA POESIE EST PHENIX

『L・ベッセー』(Les Essais) 誌第二号(一九四七年六月七月号)に発表され、ウィリー・ロマン著『ポール・ヴァレリー、詩・思想』(Willy-Paul Romain: Paul Valéry La Poème La Pensée, 1951)の十七―八ページに再録された。翻訳は後者による。

ガブリエラ・ミストラル著

『詩選』序

佐藤正彰訳

世人が私に知っている詩についての趣味、理想、習慣から、これほど遠い作品を読者に紹介するには、およそ私ほど不適任な者はないように見えるに相違ない。詩について私の繰り返し言ったところ、私のなし得たところ、自分に課すべきと思つた条件、私の発表した評論、最も古いヨーロッパの文学伝統によつて作られた一精神の、これらすべての果実は、本質的に自然な産物、ただ在るところの呼び声或いは衝撃或いは願いのみによつて、大西洋の彼方に開花した産物を鑑賞評価するには、到底私が指名されるに耐えない観がある。しかし、もしも文化が遂に自己を自省することを教えないとしたら、そして文化はその野望によつて一般的ではあるが、もしそれがわれわれに、文化自体を極めて特殊な一場合と見なす力を失わせるとしたならば、文化はそもそもいかなる価値があろうか。一人の人間がもし他の無数の全く異なつた生を生きることができなかつたならば、己れの生を生きることができまいと、私は主張する。そして私自身も、何らかの全く外的な事情は、私の書いた著作とは全く別な著作を私に産み出させたにちがいないと感ずるのである。己れ自身以外であるまいとするほど己れ自身であろうと欲するのは、無残に己れを貧しくする所以であろう。私は自分の氣に入ること好む、自分の偏執や習慣や戒律さえもに合おうと合うまいと。なぜなら、私はいか

にそれらを必然的に甚だ可しと心得る筈であらうと、それらの固定性だけでも時に私の魂を苛立たせるのである。さればこそ私は自分と似ていない人々を少しも嫌わず、その人たちのするところに、私の心を奪う——換言すれば、私を自分から引き出すに足るものを、見出すことができる。ガブリエラ・ミストラルの詩は一、二篇ならず、私にこの悦ばしい驚きを覚えさせた。

次の詩を玩味する快に逆らうものは私の裡にない。

Mon fils vierge encore どんな果物の汁じゅうも

Du suc de tout fruit, まだ知らぬわが子よ

Palpant sur mon sein わが胸に抱かれて

Grenades de sang; 血の柘榴をまさぐりつつ

Qui bats, non de sang お前の血ではなく私の血で

A toi, mais à moi, 鼓動するお前

Et qui dors formé 乳と血で形づくられて

De lait et de sang; 眠るお前

Cristal transparent 血の見える

Où l'on voit le sang; 透明な水晶よ

Lampe qui m'éclaire 私自身の血で

私が著者ガブリエラ・ミストラル夫人とお近づきになる光栄を持ったのは、先頃、地球上のあらゆる国民から派遣された人々が、人間精神の一国を建てようと試みたあの集会(2)でのことであった。まさになさるべき試みではあったが、しかしこれはおそらく常に、人間と精神との間に常に現れる相違に、衝突することとなろう。ミストラル夫人は淑やかに飾らず自国を代表され、われわれの事業に参加したすべての人々の尊敬と好感に取り巻かれていた。夫人には詩人たちの資性の特徴である、注意と夢想、外見的放心と直覚的な閃き、その結合があることは、私によく感じられたが、しかし、当時私は夫人の作品を全然知らずにいて、本翻訳の出来るのを待ってはじめて、一詩歌についてその外国語への移調が鑑賞することを許容するところを鑑賞できるまで、待つ必要があったことを、白状しなければならぬ。この一本文の変身ということは常に重大事であり、時として致命的なことである。なぜなら、問題は要するに、全く異なる原因によって原文とほぼ同一の結果を得ることであるから。この難問は散文しか相手にしない際は全く絶望的というわけではないが、しかし韻文では、即ち定義上形式と内容とが不可分であるべき場合には、絶望は免がれ得ない。さりながら私は確信するが、詩的調子と音律との忠実性と尊重に関しては、ガブリエラ・ミストラルの詩作のフランス語表現は幸いにしてマチルド・ポメスに負うて、ポメス女史はそのスペイン語の深い理解と自身の詩人の天賦によって、大作品と、精神的一致の高貴なる立場と、世界における抒情的価値の交換とのために、尽し得るだけのことを尽したのであった。

**

私はここで作者の人物と経歴について一言しよう。ミストラル夫人はチリ人である。夫人にはスペインの血があるが、しかし又原住民の血そのものもある。まず教育、次には様々の外国使節、最後に外交職或いは領事職が、よりいっそう内的な使命には捧げ得ない夫人の生涯の部分を満たす。しかしながらこの内的使命はいくつもの作品によって発現し、それらは南米全土に流布し、有無なく認められ、讚美され、ヨーロッパに及び、フランシス・ド・ミオマンドル、マクス・デローはじめその他若干の人々が、その作品について書いた記事のお蔭で、フランスに安定した地歩を占めるに到る。

*

これらの本文の集録が私に生じた第一印象は、完全に不思議ではあるが、本質的に真な、又驚くべき事物とか存在に出会ったとき覚える印象であった。驚くべきとは、自然がわれわれの想像し得たよりも遙かに多くの存在の類型と価値とを創造し得ることを、われわれに示す時、自然がわれわれを驚かすごとく、人を驚かすのである。私の今言った不思議さは、かなりしばしば、やや到る処に文学的奇異がわざと拵らえられているが、そのような文学的奇異の作製が生じ得る驚きのみに限らないことをはっきり示すために、私はことさら自然と言う。否、他人を驚かすことの計算は、ガブリエラ・ミストラルの詩の生成にはいってはいない。夫人は観念連合の偶然的効果とか、紙上で言語の通常機能に課し得る攪乱等を頼みはしない。ただ言語のあらがままの実体から、深く、身体的に、時として痛烈に感得される生命の異常な表現を、取り出すのみである。

*

この女性は彼女以前には誰もしなかったように子供を歌う。かくも多くの詩人が死を讚め、称え、呪い、

或いは呼び、又愛の情熱を説き、深く窮め、神格化したに反し、最高度に超越的な事実、生者による生者の産出に、深く想いを潜めたらしく思える詩人は乏しい。わけても、母子の親密な対決——昔の宗教画によってとくに開発されたこの大主題——の中には、感受性の絶大な力があり、それは時として殆んど野性的な情愛の激発に達し得る。それほど独占的で嫉み深いものがある。この感情の極点は愛の余裕を持たない……。

上に引用した数行によって見られたように、ミストラル夫人は自分の形づくった生命を前にしての生命の感動を、最も強烈単純なやり方で表現する。この『血の歌』には何かしら生理的な神秘観があり、そこでは純粹状態の母性が抒情的な写実主義的な用語の裡に高揚する。この母は「己が乳と血の味いをもって」眠るその嬰兒の裡に、自分自身の血を見るのである。

『眠り』と題する子守唄では、摇篮の静かな運動が、揺すられる子と共に揺する母をも眠らせる。夢が婦人を襲う。彼女は自分が全世界を揺すり、全世界は、「わが身体と五感もろとも」彼女自身と一緒に、消え失せるような気がする。

私はまた『世界の語り手』という題下に集められた一聯の作をも特筆したい。母親は子供に世界のさまざまの美を語り聞かせる、空気、水、山、光など……。私はここに絶妙の想念を見出す。「水」はこうである。

Quelle frayeur, mon tout petit,

幼けないわが子よ、お前を連れて来たら

De cette eau où je t'ai conduit

この水の何と怯えて立ち騒ぐこと

Et toute ta peur pour la joie

そしてお前の恐がるのを滝は大悦び

De la cascade qui s'épand

白布の大渦巻を身にまとった

Et qui tombe comme une femme

女のように、満々と

En grand remous de linge blanc.

拡がり落ちる滝

Ça, c'est l'Eau, mon enfant, c'est l'eau,

これが「水」よ、ねえお前、これが水

Sainte qui ne vient qu'au passage,

通り過ぎる時しか来ない聖女

Courant vite de son corps plat

平らな身体でつと駈け抜けて

En faisant des signes d'écumee...

泡の十字をいくつも切りながら

次は「動物」。

...avec leur air d'enfants perdus,

斥候のような様子をして

D'obscurs enfants qui vont et viennent

往きつ戻りつする朧ろげな子たち

Avec leurs brins de laine et crin...

少しばかりの羊毛と鬣を持ち……

Les cuirvés, veinés, tachetés

銅色や木目模様や斑入りの動物が来る

Viennent pour t'émailler le monde...

お前の世界を色とりどりに飾るために……

そしてこの一聯の中で、万物を青く軽やかにしながら燦めく、青い飛び狂う蝶に襲われ、殆んど雑踏してゐるコロンビアの谷を歌った一作は、全篇を引用したいのを我慢する。

La vallée dort, tout azurée

谷間は眠る、すっかり空色に霞んで

Dans une sieste qui divague

次々に光の中に逃れ去る